

# 信州奇人考

井出孫六

信濃のくたもすおこ坊つるぬる国こす  
 いや高きく流くも川はの遠一松存伊  
 寺四つの平ハ肥後が地海くそなをれも  
 足らうしぬ事よきとてたけんゆり  
 鞍駒ヶ嶽淺  
 向里流道よ  
 二本曾川天川

# 信州奇人考

井出孫六

物ぐさ太郎から  
 松井須磨子まで  
 平凡社



ISBN4-582-82881-7

C0021 P1800E



定価1,800円(本体1,748円)

平凡社

## 信州人は何故「信濃の国」を歌うのか？

峠を隔てて独立する盆地の“合州国”長野県。  
 その統一のシンボル、  
 県歌「信濃の国」の解明を序説に、  
 盆地の歴史・風土・人を考察する著者のフィールドワーク、  
 “信州学(シナロジー)”の試み。

平凡社

本書目次より

I 「信州学」序説

「信濃の国」——うたの来歴  
 歴史のなかの峠道

II 信州をひもとく

飯田の水引

佐久鯉

林檎園の風景

天屋衆の誕生

落葉松林への挽歌

野沢温泉——その考現学

宿場と漆器

雪と和紙

白樺と王郎

塩田平——信州の学海

安曇野と礫山

善光寺——長野村界限

III 信州奇人伝

物ぐさ太郎の転生

赤松小三郎の最期

五稜郭と金鷄勲章

「ぎやまん学校」始末

温泉に憑かれた男

松井須磨子の軌跡

平凡社

濃国の百姓たちも、ものぐさ太郎がレジームにとりこまれていくことに手をかしたといえぬだろうか。物ぐさ太郎を都へ追いやったあとの信濃国の人びとは、以来面白おかしくもない勤勉な民草になる以外の道はのこされてはいない。それよりもなによりも口惜しいのは、せつかくこの国の民話という文芸のジャンルにいささか破格な余計者の系譜の芽ばえがあったというのに、無造作にその想像力がねじ曲げられてしまったことの方だ。

しかし、肩肘張ってこう書いてきて、わたしはふと立ちどまる。物ぐさ太郎の同時代人として思いつくのは木曾義仲だ。疾風怒濤のように都に上った義仲は、やたら火を放って都大路を焼き払った。『御伽草子』の作者が、火を放たれた大宮人たちのうらみのたけを代弁して信濃の田舎人をパロディーにしたのが物ぐさ太郎の物語だとすれば、信州人は虚心にいま一度、物ぐさ太郎の転生譚を読みなおしてみる必要があるのかもしれない。

### 赤松小三郎の最期

一

慶応三年（一八六七）九月三日白昼、京都の市中、五条東洞院魚棚下ルにあつた一軒の桶屋の前で、赤松小三郎は刺客に襲われた。

同じ日、三条大橋南側擬宝珠に、つぎのような斬奸状が張り出された。

元信州上田藩 赤松小三郎

此者儀兼て西洋を旨とし、皇国の趣旨を失ひ、却て公を動揺せしめ候儀、不届の至り捨置くべからざるの多罪につき、今日東洞院五条下ル所にて天誅を加へるにつき則其首を取り肆すべきの処に候へども、昼中につき其儀をよくせず依てかくの如き也

卯九月三日七ツ時

有志中

文久年間から元治、慶応年間にかけて、京都の町には三日にあげずテロがあつて、その都度斬奸状が張り出された。「高札」と「斬奸状」とは、幕末のジャーナリズムの機能をもっていたといつてもよい。張り出された斬奸状のまえには数日人だかりが絶えなかつた。

それにしても、この日三条大橋に張り出された斬奸状は要領をえないものであつた。「赤松小三郎」などという名を、京都の町の人びとの何人が知っていたであらうか。「信州上田藩」とあるが、そんな名の藩があつたらうかと思うものもいたにちがいない。

要するに、殺されたのはとるに足らぬ小藩の名もなき男だが、その男が「公を動揺せしめた」ということで殺されたというのは、いったいどういうことだらうか。斬奸状の粗略な記述の後ろに、知られては具合のわるいことがひそんでいるのを、見物人は感じたにちがいない。

赤松小三郎が遭難したとき、魚棚下ル町の桶屋は先の様子を戸の隙間からうかがっていた。桶屋の申し立てたところでは、こうだ。

九月三日七ツ時、赤松は供の者一人を連れて、この桶屋の前を通りかかった。そのとき、向かいから大八車が一台やってきたが、その車のかげから一人の侍が突然現われ、ものも言わずにいきなり右肩を斬り下げた。痛手を受けてよろめきながらも、赤松は「おのれ！」と叫んで佩刀の柄に手をかけたが、そのとき、もう一人べつの暴漢が後ろから背中を突いたので、赤松は深傷よみでにたまらず、

うち倒れた。下手人二人は、赤松の倒れたのをたしかめるや、風のように町角の向こうに姿を消した。

しばらくして桶屋がしかるべき筋にこれを通報すると、いくばくもなく、薩摩屋敷から三人の侍が早馬でかけつけ、抱きおこして介抱するところへ、ようやく上田藩留守役赤座寿兵衛がかけつけて、赤松小三郎を上田藩京邸に引きとっていったという。

一人の供を連れていたというが、このお供のものは事件を前にしてどうしたのか、桶屋の供述では判然としない。あるいは、後ろから斬りつけたのは、案外このお供の侍であつたような気もしてくる。

上田藩京邸に引きとられた赤松の遺体の検分書には、受けた傷が詳しくとどめられている。

- 一、左頬      スリ疵二ヶ所
- 一、首廻り   切疵丈八寸五分同五寸五分深サ二寸二ヶ所
- 一、右肩先   切疵丈五寸深サ一寸
- 一、左肩先   切疵丈八寸深サ一寸五分
- 一、右腹      切疵丈五寸五分深サ五分
- 一、背        切疵丈一寸五分深サ六分

ひとつひとつの傷口は大きくしかも深いところからして、刺客の腕の冴えがうかがわれる。たぶん、これはプロの仕業にちがいない。

桶屋の通報からいくばくもなく、薩摩屋敷から三人の侍が早馬をとばしてかけつけてきたというの気になる。

もともと、京に上った赤松小三郎は、薩藩に召し抱えられたような形で私塾をいとなみ、そこには、薩藩の若いものが多数学んでいたから、師赤松の凶報に動揺して弟子の何人かがかけつけたとみれば、それは必ずしも不自然ではないようにも思われてくる。

三日後の九月六日、赤松の遺骸は黒谷の金戒光明寺に葬られたのだが、葬儀に先立って、島津侯からは弔慰金三百両が出され、その他、葬儀控帳には、「薩州様召連の下郎弁当代菓子代云々。薩州様衆四十人余寺送りの包菓子代寺へ云々。薩州様衆弟子五人棺に附添云々。入費総々金貳拾九兩壹貳貳朱」などという記述を見ていくと、赤松の葬儀は、まるで薩摩藩葬でもあったかの観がある。光明寺の葬列には、多くの薩摩藩士が居並んだ。

そればかりではない、遭難からちょうど三カ月たった十二月三日、黒谷に堂々たる墓石が建立されたが、その碑文によれば、赤松の薫陶をうけた薩藩受業門生一同の醵金によるものであった。

さすがに薩摩の方々は義に厚いとみるものもあつたが、死者を悼むその仰々しさに不自然なもの

を感じとった人も少なくはなかつたろう。おのずと、そこに妙な噂が流れることにもなった。在京諸藩の動きに一喜一憂していた公卿のあいだに、噂は流れた。情報通、青蓮院宮は、いち早く噂をとらえて、赤松の葬儀の行なわれた日の日記にそれを書きとめている。

慶応三年九月六日 朝霧 辰半より晴

一、深井半左衛門まるる。過日東洞院通り付近で薩人斬り死これあり候。風聞では被害者は信州上田藩洋学者赤松小三郎と申す者のよし。天誅の斬奸状も出たよし。尤も〇十印よほどの頃何か計りごとありや否や、複雑な内情を探るにはよほど苦心がある旨、摂(政)公に書を送り、秋月悌次郎に巨細調べるやう申しやる。

一名中川宮と呼ばれ、文久三年(一八六三)の八月十八日クーデターを演出した青蓮院宮朝彦親王には、すでに赤松小三郎暗殺の背景が情報係の一人深井半左衛門から詳しく報告されていたような文意だ。一兵の武力も持たない宮廷政治家が、幕府、薩、長、土、あるいは会津等の強大な武力を備えた諸列藩にまじって、京都政局の激動をのりきっていくためには、正確、敏速な情報の蒐集のみが唯一の武器だったにちがいない。

じつさい、「信州上田藩洋学者赤松小三郎と申す者」に天誅が加えられた事実の背後には、きわめて重要な薩藩の内部事情が伏在していたことを、青蓮院宮のときすまされた政治的触角は、みご

とにとらえていたといつてまちがいない。「〇十印よほどこの頃何か計りごとありや否や」というさりげない一節がそれである。「〇十印」とは、いうまでもなく在京最大の武装集団薩摩藩を指す暗号である。

薩摩藩内の激派の擡頭、それはもはや島津侯にも押さえることが不可能なほどの勢いであり、大久保、西郷というリーダーを得た激派は、ひそかに土佐の坂本竜馬、中岡慎太郎らを仲立ちとして、急速に長州激派に近づきつつあった。むろん、そのような動きは極秘のうちに進められていたけれども、公武一体を志向する勢力の旗頭たる青蓮院宮のもとにも、動きの断片は情報としてもたらされていた。赤松小三郎の暗殺もまた、そのような動きのなかでとらえなければ理解できぬことであったが、さすがに、青蓮院宮の位置づけは正しかったとみななければなるまい。

## 二

いったい、赤松小三郎は、どのような動きをしていたのか。赤松の行動の軌跡を追うことによつて、慶応三年夏の京都政局の帰趨きすうは占えだし、その暗殺の謎もおのずから解きあかすことが可能だったともいえる。

わずか五万石余の小藩上田藩の、足軽にも等しい微禄の士、赤松小三郎を、一挙に幕末のスター

ダムに押しあげた秘密のひとつは、彼のなみなみならぬ語学力にあった。

小三郎が江戸に出て内田弥太郎の宇宙堂に入門したのは、嘉永元年（一八四八）十八歳のときである。明治に入って初代天文台長になった内田弥太郎の履歴も興味深いが、この内田について、小三郎は算数、天文、測量、曆学、地理および蘭学を学んでいる。上田の隣藩松代で、佐久間象山が初めて洋式砲を鑄造した年だ。

内田宇宙堂での修学四年ののち、嘉永五年西洋兵学の権威下曾根金三郎の門に入って、ここでさらに、蘭学砲術などを学ぶのだが、この年、オランダからの情報として、米艦隊の来航が予報された。下曾根金三郎にも当然ニュースは入っていたろうから、小三郎は当時最も新しい情報に接しうる場所にいたわけである。果たして翌嘉永六年ペリーの率いる米東インド艦隊は浦賀に現われ、前後してプチャーチンの率いるロシア艦隊が長崎に入港した。黒船来航の報に国内は揺れた。

そのころ小三郎がどのような研鑽をつんでいたかをうかがい知るために、その蔵書的一端をみてみよう。

渾発捷徑 嘉永四年五月筆写

清水流規矩術 嘉永五年閏二月写

量地弧度算法 嘉永五年閏二月写

絳老算梯 嘉永五年十月十一日写

内田先生家書目 嘉永五年十二月六日写

豁機算法話問答 嘉永六年五月十三日写

観齋先生掌中曆書 嘉永六年五月二十八日写

円理闡微表 嘉永六年六月写

航海術 嘉永六年七月写

招差術 嘉永六年写

精要算法諺解 嘉永六年二月二日写

量地速成表 嘉永六年卯月十日写

豁術草 嘉永六年七月写

驗温管略説 嘉永七年九月写

航海表 嘉永七年冬至写

これらの文献からみれば、黒船来航の衝撃のなかで、この青年が新しい未知の分野へ踏みだしていつているさまがうかがえる。むろんすべて筆で写しとっているところに、その精励ぶりが示されてもいる。

安政元年（一八五四）には抜擢されて勝麟太郎率いる昌平丸に乗り、長崎海軍伝習所に向かっている。長崎在学五年、ここで小三郎の蘭学は完成し、英学へと進み、最も新しい兵学、航海術を修めたことがわかる。

長崎滞在中、すでに『新銃放射論』『選馬説』『矢ころのかね小銃穀率』などの訳稿があるのが注目されるが、赤松小三郎をして、新兵学の一方の権威に押しあげたものは、大作『英国歩兵練法』の翻訳完成にあった。

時代は蘭学から英学へと急速に変わりつつある。その変化の潮流をいち早くとらえ、最も需められていた兵学の分野で、赤松小三郎は『英国歩兵練法』の翻訳によって、その存在を示したのだった。

小三郎自身の記す前書きによれば、『英国歩兵練法』の原典は「ヒイルド・エキセルサイス・エント・エホリユーシヨンス・オフ・インハンテリイ」（一八六四年版）だとある。その同じ前書きに、小三郎は次のように断わっている。

予もとより文事に暗し。かつただ原文の意を存して業に施し易きを旨とする故、訳文甚だ拙陋にしてかつ謬誤なきを得ず。諸君子の校正を冀ふのみ。

その謙遜の辞にもかかわらず、この彪大な歩兵操典を訳せる人物は、当時小三郎をおいてはな

つたにちがない。慶応元年（一八六五）の春から始めた翻訳が完成されたのは、明けて二年の正月、そして下曾根稽古場蔵版として出版されたのは三月だが、それより早く、慶応二年二月には、小三郎は京にのぼって家塾を開き、英国式新兵法教授の看板をかかげるほどに広く認められるようになっていたわけであった。

薩摩藩からスカウトされることになったのは、それからしばらくのちのことである。そして、これからおよそ一年半が、赤松小三郎に与えられた最後の栄光の時間であった。

### 三

皇国の御為少しも相成候様仕り候見込に御座候。上田にて事を開き、日本に弘め候事は出来申さず。皇国に事を開き候へば自然上田は開け申候。

慶応三年三月十日付の兄桑太郎あての小三郎書簡の一節は有名なものだ。山に囲まれた信州の小藩には姑息の風がしみついていて上、当時、二つの派閥のせめぎあいの渦中にあつた。十八歳で江戸に出て研鑽につとめた赤松の、世界大の視野が、この盆地の小天地に受け容れられるはずはない。みだりに藩政を誹謗するわけにはいかぬ微禄のもの一杯の批判がそこにはこめられているとともに、封建制に閉じこめられたこの国の政治的潮流を変革するひとつの方法論が、そこにははつき

りと示されている。

つまり「中央の変革を主として地方の変革は従となる」。これが赤松小三郎の第一のテーゼであり、このレールは維新にひきつがれていくのであるが、そのとき、「地方の変革から中央を変えていく」視点が、この国の近代化のなかで完全に見失われていくことになるのではなかったろうか。しかし、それはむろん、赤松小三郎だけの責めに帰するわけにはいかない。海の向こうに目を開かれたものの、ひとしくたどる軌跡だったといつてよいかもしれない。

変革期に特有の、「早すぎる晩年」を予感したでもあろうように、慶応二年から三年にかけての赤松小三郎の知的燃焼度は凝縮されていた。かの『英国歩兵練法』の精力的な翻訳作業のかたわら、いくつかの建白が小三郎によって書かれている。

慶応二年八月、幕府征長の方針にまっ向から反対して書かれた「口上書」にも、すでに小三郎の固有な立脚点が示されているが、それがより広汎な政策論にまで拡大されて示されるのが、翌慶応三年五月、越前侯松平春岳に提出された意見書である。すでに松平春岳は幕府政事総裁の職を離れてはいたが、依然として親藩の立場からの幕藩体制の体制内変革の一方の旗手として、京都政局に一定の影響力を保持している人物であった。その松平春岳に対する「御政正之一二端申上げ奉り候口上書」は、たぶん春岳からの諮問に答えてのものであったのであろう。

全体が七つの項目におよんで、きわめて斬新なプランが提起されている。七項目を要約すれば、まず第一は公武合体を前提とした内閣と上下両院による議会の開設。第二は全国五つの都市に国立大学を設けることを中心とした人材開発。第三は農民のみにかけられた租税負担を四民平等に切り換えること。第四は国際経済に対応した通貨改革。第五は兵制の改革。第六は産業改革とその振興策。そして第七は生活構造の変革と日本人の肉体的改善策。

横井小楠や佐久間象山が朱子学との悪戦苦闘をへなければならなかったのに比べると、赤松小三郎の改革プランには、先輩がたどらねばならなかった悪戦苦闘の痕はない。それだけに、小楠や象山に見られる体系的な構造は、小三郎の改革案にはなく、どちらかといえば、「合理的」発想が改革のためのプランを単純なものにしてしまっているともいえる。

ただひとつ、全体を貫く特色として、小三郎には、強烈な「平等」「公平」思考が働いていることである。たとえば、内閣制度と議会の構想を示した第一項についてみれば、「蓋し権の帰すると申すは、道理に叶ひ、候公平之命を下し候へば、国中の人民承服仕り候は必然の理に候」「其両局（議會のこと）人選の法は、門閥貴賤に拘らず、道理を弁明し私なく、且つ人望の帰する人を公平に選むべし」とある。

第三の租税改革の項でみれば、「国中の人民平等に御撫育相成り、（中略）諸民平等に職務に尽力

し、（中略）夫々有用の職業を授け候御所置、治国の本源にこれ有るべく候」となる。

小三郎の最も得意とする兵制改革の面で見れば、すでに前年の幕府への征長反対の「口上書」のなかに、「軍事総督其以下諸軍諸隊の長官は、皆門地身分に少しも拘らず輕輩陪臣市門農民にても、學術これ有る者は御選抽相成り」と言い切っている。農民でも學術さえそなえていれば軍事総督にでもなれるのだという、そこにはきわめてラディカルな平等思想が闡明（せんめい）されているが、松平春岳あての口上書では、さらに一步すすめて、「殊に乱世には国中の男女悉く兵に用立て」と、おどろくべき着想を披瀝しているのである。

かつて、戦前に赤松小三郎の再評価が行なわれた折、東郷平八郎、野津道貫、野津鎮雄、伊知地正治、樺山資紀、上村彦之丞といった明治の将星の師であったということから軍事の創始者という側面が強調されたことがある。そしてまた、大正デモクラシーを背景として議会政治を最も早く構想した先覚者として再評価されたこともあった。いずれも、小三郎の示したひとつの側面のみが強調された歪んだ評価であったといわねばなるまい。

たしかに、兵制に関する小三郎の意見を、幕末の国際環境、国内政治状況を捨象して微視的にみれば、そこには国民皆兵、徴兵制、富国強兵、軍事優先思想の鼓吹者というイメージがつくりあげられる。だが、そういう強調符のおき方では歴史的人間の実像を浮き上がらせることはできない。



小三郎は書いている。「海陸軍御兵備の儀は、治世と乱世との法を別ち、国の貧富に応じて御算定のこと。蓋し兵は数寡くして利器を備へ熟練せるを上とす」と。小三郎が軍事国家を標榜しているのではないこと、文民的抑制の装置をすら考慮していたことがうかがわれる。されば、「乱世」には「男女悉く兵に用立てる」という「民兵」思想がそこからは導き出されてくる。彼の平等・公平感覚は、その最も得意な兵制論のなかでは、男女の間の平等認識にまで達していたという点で、おどろくべきものであったといえるだろう。

このような小三郎の平等、公平感覚は、ひとつには上田藩という小藩で養子縁組によってかろうじて微禄を得るほどに下積みからの生活から養われた。そして、高禄の上級武士の存在が反面教師として小三郎の平等感覚をきたえた。そして何よりも、蘭学から英学へと進めて欧米の新知識を吸収することによって、彼の平等、公平感覚は、ますますラディカルなものとなつていったとみることができる。

#### 四

「百論沸騰」「処士横議」、これらのことばは、幕末京都を中心として現出した政治状況を鮮やかに表現している。赤松小三郎もまた、そのような幕末の書割りのなかに登場する役者のひとりである。

徳川封建制の規範は、もはや繕いようのないほどの破綻をみせている。「処士横議」はその「結果」でもあったが、同時にまたその「原因」でもあって、幕藩体制はもはや引き返すことの不可能な坂道をころがっていく。

どのようにして、新しい政治の規範を生みだしていくのか。黒船来航を契機とした海防策に始まった「処士横議」は新しい政権樹立の構想へ向かつてつきすすんでいたが、赤松小三郎は、横井小楠、佐久間象山の敷きかけて成らなかつた公武合体の路線をひきつぎ、「薩Ⅱ幕Ⅱ一体」構想で実現しようとして動いていたのである。

『英国歩兵練法』の訳業を買われて小三郎への薩摩の信任は厚かつた。とりわけ、島津侯と西郷隆盛に直接接触しうる立場に小三郎はいた。一方、中根雪江を仲立ちとして越前侯松平春岳、永井玄蕃を仲立ちとして会津藩中枢への連絡をも小三郎は保つことができた。公武合体、幕Ⅱ薩和合を画策しうる適材のひとりであったといえるだろう。

たしかに、薩摩は京都に渦まく台風のような政局の目であった。その薩摩を射程に入れながら、もうひとつの新しい路線の実現が、極秘のうちにすすめられていた。そのプロモーターは、土佐の浪人坂本竜馬に中岡慎太郎であったことはいままでもない。しかもそれは、赤松小三郎が上京した

慶応二年の春には、ひそかに仕掛けられて動いていたことを、小三郎は知る由もなかった。そこに小三郎の役柄の喜劇性が生まれてくるゆえんだ。

たしかに小三郎は江戸滞在も長く、その間には長崎の海軍操練所にも留学し、開港にぎわう横浜にあって国際的な視野をも広げてはいたけれども、京都に渦まく台風のような政局を泳ぐには、経験も不足していたし、薩摩、長州、土佐、会津、越前など、強力な武力を背景とした列藩の合従連衡に似た複雑な動きや、隠微な宮廷政治の内側については何らの知識も持ちあわせなかった。危険な賭の要素が、その行動につきまとうのも止むをえない。

なるほど、『英国歩兵練法』は洛陽の紙価を高からしめはした。薩摩、肥後、越前などの列藩諸侯がこの新知識を自藩にとりこむことによつて、混沌とした政局に一步でもぬきんでることを目ざすような状況の中で、小三郎は自己評価を誤るところがあつたかもしれない。列藩はただ、この小藩上田の無名に近い人物の新知識さえ自藩にとりこめば、それで足りたというわけだ。私塾に各藩の若ものが多く派遣されてきたのも、そのためでしかなかつたにちがいない。

最も積極的に小三郎に接近してきたのが薩摩藩であつた。慶応二年（一八六六）三月江戸の下曾根稽古場蔵版として出版された『英国歩兵練法』の原典は一八六二年版であつたが、薩摩藩はそれを見ていち早くその訳者を身柄ごとスカウトし、一八六四年改訂版を訳させ、これを自らの印刷所

で出版するという手際の上さを示すとともに、訳者による直接の講義を、京都の薩摩藩邸で行なわせ、多くの若ものを、その講筵こうえんにはべらせたというわけであつた。

薩摩藩にとつては、小三郎の知識をそっくりそのまま吸収すればよかつた。下曾根版は一八六二年版、薩摩の赤本と呼ばれる新訳は一八六四年改訂版、英国歩兵操典に関して、薩摩は、幕府に對して二年の長を示すことになる。輸入兵器の日進月歩に見合つて二年の長を示すのは、決定的意味をもつた。薩摩のような大藩にして初めて可能なことであつたらう。

赤松小三郎には、そのような価値が見こまれていた以上、佐幕派の上田藩が、小三郎の帰国を執拗に求めたのは、あるいは江戸の意向を受けてのものと思像することさえ可能だ。

小三郎はいつのまにか、幕府側と薩摩側双方の軍事機密に通曉した人物になつていた。京都の政局が公武合体から一転して薩長同盟へのヴェクトルに急転するとき、藩命によつて帰国しようとする小三郎を、薩摩側はそのまま見送るわけにはいかなかつた。赤松小三郎暗殺が、大久保、西郷から中村半次郎にひそかに命ぜられたという噂も、あながち無根のものではなかつたらう。

中村半次郎こと桐野利秋の『在京日記』に、なんと、その日のことが克明に記しのこされていて、粗い文章に血糊が匂っているようだ。

九月三日 晴

小野清右エ門・田代五郎左エ門・中島健彦・片岡矢之助・僕より同行、東山辺散歩、それより四条を烏丸通まで帰りかけ候ところ、幕逆賊信州上田藩赤松小三郎、この者洋学を得候者にて、去春より御屋敷御頼みに相成り、今出川、烏丸通四へ入ル町へ旅宿致し、諸生も肥後・大垣・会津・壬生浪士、内より老人弟子おり、その他にも諸藩より入込みも多し。

しかるところ、このたび帰国の暇申出候につき、段々探索方に及び候ところ、いよいよ幕奸の由分明にて、尤も当春も新將軍へ拜謁等も致し、この頃も同断の由、たしかに相分り、折柄今日東洞院四条通西へ入ル町にて出合ひ候につき、捨置くべからざる者にて、それより小野・中島・片岡の三士は烏丸四条南角にまんぢう屋あり、この処に待たせ置き、田代と僕、赤松の跡を追ひつき候ところ、四条より東洞院を伏見の方下り候につき、追ひ候ところ、仏光寺通にて屋敷者野津七次外に式人あり、赤松と相角致し、おひ手を通り、我々は五条下ルまで越し、跡へ引返し候ところ、魚棚上ル所にて出合ひ、我前に立ちふさがり、刀を抜き候ところ、短筒に手を掛け候へども、左の肩より右の腹へ打ち通し候ところ、直ちにたふるところを、田代後ろよりはるふ。老歩余り歩みたふる也。

直ちに留めを僕打つ。合せて式つ刀、田代も合せて式つ刀でおはる。打果たし置くもの也。それより直ちに引返し、右の三士の居る処まで来る。五士同行にて邸營に帰る也。

これが、人ひとりを殺した、しかも一時期とはいえ兵学を授かったはずの師を殺したものの日記というものであるか。散歩の途中で野犬一頭を撲殺してきたとでもいうような風情がある。なるほど、事実としては桐野利秋の記述は正確であるのかもしれないが、ここには真実はぼかされたまままだ。赤松小三郎を刺殺するために、少なくとも八名の薩摩藩士が動いていると読みとることができる。大がかりな謀殺計画がそこにあつたと考えれば、その謀殺と見合う形で、慶応三年九月六日、赤松小三郎の盛大な葬儀が、あたかも薩摩藩藩葬のごとく営まれたことが、幕末血も凍るような京都政局の苛烈さのなかで一定の整合性をもって理解されてくるし、青蓮院宮がその日記に記した薩摩の内部への疑いもまた見当はずれのものでなかつたと合点されるのである。

赤松小三郎の訳業の遺産がいま、思わぬところにのこっている。学校で体育の時間に使われる用語のなかに、「右ヘナラエ」「カケ足ススメ」「気ツツケ」「ソノママ休メ」「足ブミ」というような号令がある。これらはすべて、かの洛陽の紙価高からしめた『英国歩兵練法』のなかの小三郎苦心の翻訳の一節から抜きだされたものであることは、案外知られてはいない。

柴崎新一著『赤松小三郎先生』（昭和十四年、信濃毎日新聞社刊）から多く参照させていただいた。記して感謝いたします。